



長野県長野市立三陽中学校 2年

山崎 茉心路

目に見えないもの

「今は障害者に対する教育や日常生活に対する支援や活動が身近でおこなわれているが私が子供の頃はなかったから」

と母は言います。

私の母は六年前に病気になりました。世界的にもめずらしい病気で難病指定されています。そんな母ですが「いつ亡くなっても後悔したくない。子供達は悲しいかもしれないが、『ママは、楽しく充実した人生を送った』と思ってもらいたい」と一生懸命仕事や家事を行い、旅行などに行き、外見では障害があるようには見えない日常生活を送っています。

三年前まで母は一日中酸素吸引が必要でした。外出する時も酸素ボンベを使用していました。幼児は保護者の付き添いが必要で靴を脱いで上がる場所で施設の方に

「それ持ち込まないで、汚いでしょ」

と言われ医療器具と説明すると

「受付で雑巾を借りて拭くか、ここから出て」

と言われた事がありました。市役所で管理している施設です。母はケースワーカーさんに相談し他の人が同じ思いをしてほしくないからと市役所に伝えていました。人込みの中で、

「こんなに混んでいるのに、そんなの持ち歩いて、じゃまだね」

とお年寄りの方から言われていました。私の友達は

「それは何ですか？」

と聞きます。母は分かりやすく説明してくれます。母が病気の事もあり、父が学校の役員をしています。私は友達に聞かれたら、母が病気になることをちゃんと説明して答えます。だけど何も知らない方が母に

「旦那さん役好きなのね。何もしないで楽出来てうらやましいわ」

と言われたと父に話していました。私には、

「大丈夫。ママ大人だから。強いから。子供は正直だから疑問に思ったら何でも聞いてくれるから答えられるし、見たものを素直に受け入れる事が出来るけれど、大人はそれがなかなか出来ないから」

と言っていましたが、家に帰ってきたとき、元気が無かった母を私は知っています。私は何も言えなかったし、よく分かりません。だけど、人間が、生活してきた環境、経験、知識の中で物事を判断し『言葉』にし『行動』するのであれば、障害者に対する教育は子供だけでなく大人も必要だと思います。いろいろな障害があり日常生活を一生懸命過ごしている事を知識として知ってもらいたいです。外見だけで物事を判断するのではなく、思いやりの気持ちを持ち『言葉』にしてほしいです。言葉の重さ、相手にあたえる影響、もし自分ならどう思うか考えて『行動』してもらいたいです。

私は目に見えない言葉や気持ちを大切に、自分の知識や経験を育てていきたいと思っています。